

現在という場所へ

六月二十七日(日)午前六時。招待所の部屋はまだ眠りの中だ。ひとりベッドで荷造りをし、さて、と言葉にはならない気合を自らに入れる。いつものバッグに加えて、昨日王府井で買ったお土産物の大袋を抱え、不自由な姿勢で部屋の扉を押し開ける。人気のないロビーを渡り、中庭から歩道に出る。北京の朝。

言葉なく、まだ目覚めの気配の乏しい朝の歩道をひとり歩いてみると、一足ごとに、ひとりという鈍痛のような感覚が、僕の中で響く。それは、親しい街、親しい人たち、親しい毎日をあとにするときには必ずあらわになる感覚だ。ひとり存在するという感覚。それが苦痛なのか、期待なのかは僕には判然と言いうことができない。ただ言葉もなく、何事かに耐えるように一歩一歩を運ぶのだ。いわばそこに存在するということそのものを耐えるように。汗を流し、歯をくいしばり、ということではなく、ただ一歩一歩たんと、いわば、耐えている。

北京南站はあいかわらず汚れていた。土埃にまみれたような民族服に身を包んだ少数民族の女性たちが、あてもないように道端に立ちつくしていた。歩道脇には、彼女たちのものだろうか、野宿のふとんや火を燃やした跡、煮炊きに使う大きな缶などが見られる。古い駅舎に囲まれた構内にはなにか饅えたような臭いが漂っていた。

構内の中庭にはすでに二、三の行列ができていた。行列の前にはプレートが据えられていて、列車番号が示されている。待合室ではなく中庭に行列をつくるということが初めての経験だったので少しとまどったけれども、すぐに目的の列車、三〇九次の列車の行列を見つけた。その最後尾につき、荷物を下ろして、ひと息。しばらく待っていると、服務員の先導で、行列は駅舎の改札へと進んで行った。

三〇九次の列車は六・五〇北京南站発で、天津着は九・〇六。見なれた中国の田園風景が車窓を過ぎていった。朝が早かったこともあって、幾度か居限りを繰り返し、あつという間のように天津に到着したのだった。

六月二十七日(日)午前九時過ぎ、僕は同乗の旅客たちの流れに押されるようにして、天津駅の駅前に降り立つ。天津駅のビルは八八年に完成したという立派な建物だけれども、駅前の広場は人々がひしめきあっていた。列車を待つ人々や、チケットを求める人々、あるいは着いたものとりあえずの行き場のない人々、出迎える人、宿の客引き、あるいは弁当売り。列をつくる人、立ちつくす人、座り込む人、あるいは植え込みの脇に寝そべる人。

人々の雑踏に立ちつくし、それから僕はとりあえず小件寄存処へと向う。天津には今夜一泊だけし、明日朝には塘沽の港へ行くので、必要なもの以外は預けてしまおうと思ったのだ。それにすぐに宿が見つければいいのだけれども、うまくいかなくてうろろろすることになれば、重たい荷物はじやまだと思ったのだ。手荷物預けは大きな荷物二つで六元。これまでの経験では一元程度の感覚だったので、その高さに僕は少しとまどこう。

重たい荷物も預けてしまつて身軽になつたところで、さつそく宿捜しにとりかかる。ガイ

ドブックの情報では、安宿としては駅前の天海旅館と、駅から少し離れた百恵飯店というのが紹介されていた。他に一泊二百元もするようなホテルも二、三紹介されていたけれども、こちらの方は僕には関係がない。とりあえず天海旅館にあたってみることにした。

駅前の雑踏を抜け出して、ロータリーの脇の道を渡ったところに天海旅館のある雑居ビルは建っていた。ビルの六階あたりの壁には『天海旅館』の小さな看板が見られた。ビルの一階は大きな商場のようになっていて、商場を抜けて、その一角にあった階段を登っていった。しかし天海旅館はなく、帳場らしき場所には〇〇招待所という宿の名前が記されている。その階より上は工事中。帳場にいた男に天海旅館の場所を尋ねてみるが、うまく中国語が聞きとれない。仕方ないので、

「この招待所に泊まりますか」と男に尋ねただけでも

「ここには外国人は泊まれない」という答え。

すぐ退散し、それから『天海旅館』の看板は出ているのだからこのビルのどこかにあるはずだと考え、下の商場のあたりをうろろ、いったんビルの外に出て、どこか他の入口はないものかとうろろするのだったけれども、天海旅館はどこにもない。おそらく天海旅館はつぶれてそのあとが〇〇招待所になったか、その上の階が工事中のようだったので、改装中なのかもしれない。

天海旅館はあきらめて、駅近くをうろろろとして二、三の招待所をあたってみた。しかしどこも、外国人はダメ、というそっけない答え。はいそうですか、とあつさり引き下がっているばかりでは事態は打開できそうにもないので、

「それでは、外国人も泊まれる宿を紹介してください」

と食い下がると、宿の人は簡単な地図を描いてくれたりして、もう少し大きな宿を紹介してくれるのだけれども、実際にあたってみると、

「我是日本人（私は日本人なのですが）：のひと言で、さも迷惑そうに追い払われるのだった。

僕は少しあせっていた。泊まる宿がなかなか見つからないという事実そのものよりも、さも迷惑そうに追い払われるということが次第に僕の心を沈ませていくのだった。そういうことがたび重なり、あたかも天津という街そのもの、そこに住む人々みんなが、僕という存在を拒否しているかのように感じられてくるのだった。

とぼとぼと、僕は駅前から続く建国路を歩いていった。建国路をずっと歩いて、天津の街中を流れる海河という河を渡って、しばらく行ったところに百恵飯店があるはずだった。北京の招待所で仕入れた情報ではそこも泊まれるかどうかは分からないのだけれども。

途中、建国路に面して、鉄道招待所という宿が目についた。小さな宿ではどこも断わられていたので、おそらくダメだろうと思ったけれども、ダメでもともとという思いで入っていた。

「日本人なのだけれども、泊まれるでしょうか？」

宿の男は、しばらく他の男と相談し、

「もちろん泊まれる。しかし相部屋はできないから、今部屋を空けるようにするから、しばらく待っていなさい」

「…いくらですか」

「六〇元」

ドミトリーに比べるとずっと高かったけれども、わざわざ前客を他の部屋に移して、部屋を空けてくれるという親切に、僕は一も二もなく泊まることにしたのだった。

しばらくして宿の女性が案内してくれた部屋はツインのこざっぱりとした部屋だった。バス・トイレももちろんついている。一緒についてきた先程の男は、僕があまり中国語を話せないのを知ると、筆談で、昼食はどうするかとか、明日塘沽へ行くのなら七時頃に列車があるとか、何か必要なことがあればいつでも言ってきたか、いろいろと親切に伝えてくれた。

宿の人が出ていったあと、僕はひとりお茶を飲みながら、休憩した。招待所と名のつく小さな宿にはずっと断わられどおしだったので、ひとり部屋に落ち着いても妙に腰が座らなような感じなのだ。もしかしたらなにか落とし穴が待っているのではないだろうか…。

落とし穴は、すぐにやって来た。

おそらくあとから事の次第を聞かされたのだろう、女主人と見える人が、トントンと扉をたたいて、部屋に入ってきたのだ。

「申し訳ありませんが、この招待所には外国人を泊めることはできません。他のホテルを紹介いたしますので、そちらの方に移っていただけませんか」

僕は穴をスコンと落ちたような気がした。しかしここで粘ってもどうなるものでもなさそうだったので、あっさり女主人の言葉を受け入れる。わずかな荷物を再び手にして、鉄道招待所を出て、宿の女性の先導で建国路を歩いていった。

ふと立ち止まった女性が指差したのは、××酒家という立派なホテルだった。なにごとか言葉を残して去っていく女性に、謝々、と言葉をかけて、僕は大理石造りの立派なロビーに足を踏み入れる。心のどこかにわき上がってくる悪い予感を打ち消すように、ホテルマンの制服に身を包んだフロントの若い男に声をかけた

…にべもない。

再びひとり路頭に放り出されて、僕は雨にたたられた野良犬のように建国路を歩いた。胸の中には、腹立ちや嫌悪感や無力感がうずまいて、何度も僕は引き返したくなったのだった。しかし、いったいどこへ？ 北京の招待所？ 敦煌の宿？ ずいぶんとなつかしい感じのする衡陽の旅社へ？ それとも日本の僕の文化住宅へ？ 引き返すのか？

しかし、もしきびすを返したとしても、そこにはなにもない。引き返すことなどできないのだと、僕は思う。やけに重い足取りを、それでも僕は一歩ずつ運んでいった。

建国路を歩き、海河を渡り、しばらく行くと、東馬路に突き当たる。東馬路はちよつとした繁華街になっていて、車やバスがひっきりなしに行き交っていた。百恵飯店は突き当たり

の角にあり、すぐに見つかった。新しいホテルではないけれども立派なホテルで、繁華街の

真中のホテルらしく女性服務員はきらびやかなチャイナドレスに身を包んでいた。

「我想住你们飯店。我是日本人。可以吗？」

にこやかな表情を浮かべていた美人服務員の顔がやにわに歪む。さも迷惑そうに、野良犬を追い払うようなしぐさとともに、言葉を投げつける。くつきりと体の線を浮き出させた美しいチャイナドレスが、とても権力的に感じられたのだった。

やっぱりそうだと僕は思う。この百恵飯店は中国人用のホテルで、ガイドブックには日本人でも泊まれると紹介してあるけれども、おそらくそれ以降通達が徹底されたのだ。通達の徹底度は地方によってかなりののばらつきがあり、だからこれまで中国人用の宿に泊まることもできたのだろうけれども、ここ天津ではそれが厳しく徹底されているのだ。僕はロビーのソファ―に腰を下ろして、地図を見ながら今後の方針を検討した。外国人用のホテルはとも高く、まだここからも駅からもとても離れているように思われた。かといって、ここ天津では中国人の宿にもぐり込むということもできそうにはない。ふと、僕の心の中を西安駅の情景が過ぎった。中国最後の夜を駅前の広場で過ごすのも悪くはないかな、とふと僕は思う。

目の前の男がしきりになにかを話しかけていた。漠然としかその意味は分からなかったけれども、ホテルまで連れて行ってやろうかと言っているようにも思われた。しかし今さら外国人用にしたらえられたホテルに入る気にはなれなかったのだ。男の言葉を無視し、煙草を足もとに投げ捨て、ズックで踏みつけながら立ち上がる。チャイナドレスにつばでも吐きかけるような気分だ。

暗い気分で天津駅に戻ってくると、あいかわらずの雑踏だった。だが散々宿を断わられたあととあって、その雑踏だけが僕にかろうじて憩いを与えてくれる。そこには行き場のない人がいた。あるいは長い待ち時間をただ呆然と待っている人。用のない人。座り込んでいる人、立ちつくす人。人々の間をゆらゆらと行ったり来たりする宿の客引き。彼らの間に立ち混じるとき、何ものからも拒否されているようで、どんどん落ちこんでいくようだった僕の気分は、ようやくある種の温みに触れられたように安堵の息を吐くのだった

腹が減っていたので、弁当売りの弁当(一元)を買い、付近の石段に腰を下ろして食べた。目の前を行き交う宿の客引きに泊まれるかどうかを尋ねてみるということも考えたけれども、おそらくダメだろうと思い、僕は本気で野宿のことを考えたのだった。しばらくぼんやりと駅前の雑踏を眺め、それからとりあえず明日の天津―塘沽のチケットを買っておこう、と思う。

售票処は混雑していたけれども、近距離の窓口はそれほどでもなく、五分ほど並んだだけだった。

「明天、七〇三次、到塘沽」

と告げる。明日、七時三五分の発だ。

ものも言わずに、服務員はチケット(一・三元)とおつりを投げ返した。窓口をあとにし

ながら、ふとチケットを見ると、なんと今日の七〇七次のチケットだ。時刻表を調べてみると、一五・五〇の発。僕の言葉がうまく伝わらなかったのか、それとも近距離のチケットは当日分しか売っていないのかはわからないけれども、がくぜんと僕は立ちつくし、それから一元ちよつとのことだから、また明日買いなおせばいいか、と思う。

中国人たちと同じように、駅前広場の適当な場所にバスタオルを敷いて横になった。しばらく眠ったけれども、昼間だということもあり、周囲のざわめきも気になってゆつくりとは眠れない。時間はゆつくりとしかその歩を進めず、これから先の長い午後と夜のことを思うと、少しうんざりとした気分になるのだった。

折しも小雨がばらついた。雨を避けるために駅舎のひさしのあるところへ移動し、ポケットからさっき買ったチケットを取り出して眺めた。そして、ふと思う。どうせ野宿をするのなら、いつそのことこのチケットで塘沽まで行ってしまおうか、と。塘沽の港なら、もっと落ち着いて、もっと人知れず野宿をする場所があるかもしれない。それに明日の朝、もう一度チケットを買うにしてもうまくいくかどうか分からないし、朝に焦って行動するよりも、先に塘沽まで行ってしまっていた方が気分的にも楽だ。塘沽には国際海員倶楽部というホテルもあるので、うまくいけば泊まれるかもしれない。

折しも、駅の職員が駅舎のその場所に陣取った僕たちを追いたてる。そこは貨物か何かの搬入口になっているらしくて、ちょうど貨物が着いて、構内に運び入れるところだったのだ。それを機に、小件寄存処から荷物を受け出し、僕は候車室へと入っていった。駅の入口には職員が立ち、いちいちチケットを確認していたのだけれども、もちろん問題はない。おそらく旅客以外の人間を駅から締め出そうとしていたのだろう。

七〇七次の列車の改札は出発の一時間ほど前から始められた。チケットには座席指定が記されていないなかったので、少し心配したけれども、おそらく近距離の列車なので、中国にはめずらしいけれども、自由席になっているのだろう。改札が始められたばかりでがらがらの車両に乗り込み、適当な座席に腰を下ろした。ずいぶん空いた列車だと思ったのだけれども、出発時間にはほぼ満員になった。

二か月間の旅の間に幾度列車の硬座車両に乗り込んだことになるのだろうか。だけれども、わずか一時間弱のこの列車の旅は、僕にはひとしおだった。ゴトゴト音を立てながら進む列車の、その背後には何もいいことがなかった天津の街、そして前方にかいま見えるのは何もない港の片隅で風に吹かれながら野宿する自分の姿。なんという旅だったのだろうか、とふと僕は思う。そして旅を総括するものとしての野宿の姿が、僕の中国散歩にとっては妙に似つかわしいもののようにもまた思えてくるのだった。

列車が塘沽站到着したのは、午後四時三五分。塘沽から天津港まではバスが出ているという情報を持っていたけれども、さてバス停がどこにあるのか分からない。駅前広場といつてもただ歩道が少し広がっているだけで、バス停などは見あたらないし、駅前の賑わいというものもまったくない。同じ列車に乗っていた乗客たちはすぐにいなくなつて、閑散とし

た駅前には僕ひとり。

「どうしようか…」

もしかしたら事態はますますひどい方向に進んでいるのかもしれないという思いが心をかすめ、少し心細い思いでしばらく立ちつくすのだった。

駅近くの歩道に飲物の屋台が、ポツンと一軒店を出していた。すがるような思いで屋台に近づき、ビンのコーラ（一・一元）を注文し、屋台の長椅子に腰を下ろした。コーラを飲みながら尋ねると、屋台のおばさんは新港行きのバス停の場所を指差しながら、親切に教えてくれた。

新港行きのバス序は駅のすぐ近くにあった。駅前からは死角になっていて見えないので分からなかったのだけれども、小さな広場になっている。しばらくしてやって来たバスに乗って、まずはひと安心。終点が新港だから黙っていても行き着くことができる。

塘沽の駅から新港までは三、四〇分もかかっただろうか。漠然としたイメージですぐ近くだと思いついていたので、意外だった。途中には塘沽の街だろうか、ちよつとした繁華街があり、百貨大楼なども目についた。この旅で中国の街を目にするのもこれが最後だと思つと、その街のたたずまいが妙になつかしいもののように思われるのだった。

曇天に雨が、またばらつき始めた。新港のバス停を降りて、あたりを見まわすと、がらんとして人気がない港の風景。道路を隔てた向こうに、すぐに天津新港国際海員倶楽部という名前のホテルが見えた。

バス停のすぐ近くに、ひっそりと一軒の屋台が店を出していた。少し濡れた木の長椅子に腰を下ろし、ラーメンを食べる。急ごしらえのテント地の雨避けが、風にパタパタとなびいていた。

僕は野宿に怖じ気づく。雨が降り始めていたこともあるけれどもこんな誰もいない場所で、ひとり野良犬のように身を縮こまらせるのは、考えただけでもつらい。しかも旅の最後のひと夜を。あまりうまくはない大盛りのラーメンを、それでも四苦八苦しながら食べ終えて、祈るような気持ちで、僕は国際海員倶楽部の建物の方へ向かったのだ。

ホテルは国際と名のつくだけあって、もちろん外国人用。部屋が空いているかどうか心配だったのけれども、ロビーにも人影はなく、宿泊客は少ないようだった。フロントで尋ねると、もちろん部屋は空いていて、単人房（シングル）が一泊七元。ドミトリーにばかり泊まっていた旅の後半では一番の高い宿泊費だけれども、もちろんチェックインするのと同じだ。

夜。夕方からばらばらと降り始めた雨は、しだいに本降りになっていった。たつぷりとしたシャワーを浴び、さつきホテルの売店で買い込んだ青島啤酒を傾ける。静かな雨音がひっそりとシングルの部屋と、そのベッドに腰を下ろした僕とを外の世界から遮蔽しているようだった。雨の遮蔽の向う側には中国の大地と、街と、そして中国の人々。この二か月間のすべてのできごとが、すでに遮蔽の向う側を通り過ぎ、もはや手の届かないもののように、僕には感じられたのだった。

現在は刻一刻となだれ落ちていた。僕は、ふと現在というものを感じたような気がする。それは僕がつかもうとして、つねに失敗しているものことだ。現在。未来の方向に企図されず、また過去（歴史）によっても支えられてはいない、もうひとつの次元。いわば存在の次元のことだ。身震いの次元。一切がなだれ落ちていくその縁に立ちつくし、めまいする次元。可視のただ中にひそむ膨大な不可視。僕はある種の落下を予感する。いや、それが落下なのか、上昇なのか、あるいは移動なのか、僕には分からない。ただ分かることは、落下を予感しつつも、そこに踏み止まっている自分のことだ。言葉なく、いわば存在を耐えているという感覚。ただたんとんと耐えていくだろうという予感。

テレビは中央電視台の独白を続けていた。僕は青島啤酒の二本目を飲みつくし、旅をくく。そうであるより他はなかったものとして。どうしようもない過失の感覚と、悔恨と、そしてある種の満足とを、旅を閉じる結びにおいて。

*

次の朝、雨はまだ降り続いていた。ホテルをチェックアウトし、黒いこうもり傘をさして、道路を渡る。客運站の前広場には水たまりが広がり、その片隅には濡れねずみのような一軒の屋台。中国で最後の朝食をその屋台でとることにした。

濡れた道路を渡る僕の背後には中国。そして二泊三日の航海の前方には、日本。おそらくは、あいかわらずの毎日が待っている。だが、僕はこの瞬間のことを、現在というこの不思議な時のことを、そして現在という瞬間に直面して、今僕が味わっているかすかな悔恨に似た思いのことを、僕は忘れないでいようと思うのだ。そのことがどういう意味をもつのかは今の僕には分からない。だけれども、二か月間の旅の終わりにたどり着いた場所が、現在という場所であるということだけは、僕には分かる。

日本人だということが分かって話しかけてきた屋台の若者たちと二言、三言を交わしながら、湯気をたてるラーメンを食べた。

「謝々、再見」

と僕は言い、ついでに使い切れなかった人民幣でカートンの中国煙草を買い込んだ。

「さてー！」

と、僕は言葉にはならない気合を自らに入れて、降り続く雨の中を、客運站の方へと向かったのだ。